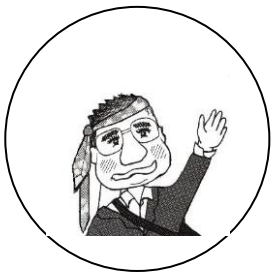
大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン　　ぽん子画
（530-0041）大阪市北区天神橋 1-18-25　第 3 マツイ・ビル 201　ＴＥＬ：06-6354-3011
お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。（E-mail：daimao@travelmitra.jp）

霧が覆い隠すシッキム王国の〝神秘〟（13）

おおえまさのりの『チベットの死者の書』は、英語版からの翻訳本であったが、川崎信定『チベットの死者の書』（1989）は原典訳であった。チベット画家ミエさんはこの点に信頼度をおいて、わが輩に購読を勧めてきた。

全くの「はったい粉」風味かとおもいきや、川崎もアメリカに留学し、インド経由で帰国した。これが逆回りであったら、（良いか悪いかわからないが）翻訳の印象もかわったかもしれない。

川崎によると、アメリカは「当時全盛をきわめたヒッピーやフラワー・ピープルのなかでサイカデリック・エクスペリエンスの指南書」として、『死者の書』は読む本というより「礼拝の対象」であったという。サイカデリック体験とは、薬物による幻想体験のことである。わが輩が本能的に「コカ・コーラ」味を避けた理由である。

わが本名から、「大魔王、あれ吸ったでしょう！」などという人がいるが、わが輩は一度も吸ったことがない。全くわが輩は常識派なのである。

このシリーズの冒頭に現れた心理カウンセラーのＪ女史は、「死んでから 49 日間、屍に向かってチベット語のお経（死者の書）を唱えつづけるのよ」と言ったが、わが輩は（49 日間も屍を置いておくと腐敗するのではないの？）と思ったが、黙っていた。

さて、チベットの『死者の書』は、日本でいう『枕経』に近いものだと考えれば理解が早い。お爺ちゃんが亡くなったら、すぐにお寺さんがやってきて枕元で『枕経』を唱える。（お浄土はあちらですよ。安心して）と示してあげることである。安心するのは遺族なので、お爺ちゃんに聞こえているのか、いないのかはさほど問題ではない。

チベットでも僧侶がやってきて『死者の書』を読誦する。『枕経』との大きな違いは、輪廻転生をはっきり打ち出していることである。肉体はすでに機能しないが、魂（意識）は存在していて、次の存在（人間・動物等）に生まれ変わるという説である。次の「生」に産まれるまでの期間（四十九日間）を「中有」（バルドゥ）という。

死者の意識は、死後三日間半して突然目覚める。ところが身体を動かすことも、家族の呼びかけに応えることもできないことに気づく。まだ魂は屍に宿っているが、こんな状況に魂だって不安になる。その不安を解くのが『死者の書』である。

川崎はダライ・ラマの本拠地ダラムシャーラーで、ヒッピーたちに出会った。彼らは川崎

にＬＳＤ薬物による幻影体験を語ったが、共通したパターンがあった。強烈な閃光、春の叢林、明るく輝く色（赤・黄色・緑）、母胎・子宮をおもわせる形状などであった。これが「死の体験」に類似しているというのだ。しかし、この幻影体験が即ち「死の体験」そのものと断定はできない、とわが輩は思う。死者がその体験を語ることができないからである。稀に蘇生する場合がある。三途の川まで行ったが引き返しきたなどの話は、精神と身体が再結合した瞬間の一種の幻影体験だと、わが輩は思っている。完全な死からの復活ではない。

わが輩の死に対する見解は別として、『死者の書』では死後に肉体が硬直しても魂（意識）が存在しているということである。しかも、その魂は、暗闇に怯える魂、再生のための方向が分からない魂、つまり「迷える魂」なのである。チベットの僧は枕元で、『死者の書』を耳元で読誦して、迷える魂の不安を取り除き、再生への道しるべを示すのである。

さて、ここで話をガラッと変えよう。
わが輩は、二年毎に南インドのアシュラマム（宗教的施設）を訪れている。このアシュラマムの詳細は別稿に譲るが、いつもテーマは「私とは誰か？」である。
今回はK先生が、日本人としては初めてのサット・サンガを開くことになった。サット・サンガは、真理の探究の集いのことである。英語やインド語のサット・サンガはあったが、日本人による日本語のサット・サンガは今までなかった。画期的なことであった。
与えられたテーマは「アドヴァイタ」（不二一元論）であった。「汝はそれなり」、「梵我一如」などと言い表される。「汝」は本当のわたし、または「真我」のこと。「それ」は、ことばを超えたもの、この際「全宇宙」といっておこう。本当のわたし＝全宇宙という思想である。誤解を恐れないで喩えると、わが輩は全宇宙の中の地球にいる。それ故、全宇宙なくしてわが輩の居場所はどこにもない。また、わが輩は宇宙の塵のような存在なのである。それなのにわが意識は、わが輩は「一人天下」として存在している、と錯覚している。
K先生は、このインド哲学をわれら素人にも分かりやすく説きだした。
ところが、アシュラマムの常住者シュンヤ女史の顔がゆがんでいるようにわが輩にはみえた。そして大袈裟な表現だが「炸裂」した。
「私はカラダではない、私はハートではない。そこから始まるのよ！」
アシュラマムは知識集積の場ではなく、エクスペリエンスの空間、私とは何ものなのかを探究する聖なる空間なのよ、と言いたかったのであろう。わが輩は肉体でもなく、精神でもない。それなら何なの？と、探っていくのが「私とは誰か？」の根本的テーマなのである。
われら全員が一瞬氷のようにかたまった。

ついにタイム・オーバーになったので、最後にわが輩は全員に質問した。
「肉体がなくても、『私とは誰か？』と問うことができますか」
「ＹＥＳか、ＮＯで応えて下さい」
シュンヤ女史とヨーガ医師は、「ＮＯ！」と答えた。
K先生は「ＹＥＳ！」と答えた。
これは面白くなってきた。
正解は言わない、というよりわが輩も分からない。読者諸氏は「バルドゥ」（中有）、「迷える魂」を参考にして考えてみては如何か。
今回は小難しくなったが、次号は旅の終わりに「奇跡」について再考してみよう。